

多角的な視点からサポート

アスリートのための スポーツ医療



スポーツに特化した医療に取り組む『熊本回生会病院』の『スポーツメディカルセンター』。スポーツ外来患者数は、開設時からわずか4年にして約8倍強となり、そのニーズの高さが伺える。いったいどんな医療なのか?そのセンターを統括する診療部長の鬼木泰成医師に話を伺った。

リハビリテーションセンター
熊本回生会病院
スポーツメディカルセンター診療部長

鬼木 泰成先生

日本整形外科学会専門医
日本スポーツ協会公認スポーツドクター
熊本ヴォルターステームドクター



多くのプロのアスリートたちも鬼木医師の診療を求めてやってくる

復帰を前提にした治療 予防と能力向上も視野に

2015年「熊本回生会病院」の新病院開院と同時に、熊本で初めて開設された「スポーツメディカルセンター」。学生スポーツ選手からプロアスリート、シニアのスポーツ愛好者まで、幅広い年齢層が診察にやってくる。センターを統括する鬼木医師は「当センターでは、ケガの手術や治療に加え、ケガを繰り返さない予防、さらにはパフォーマンス

の向上を視野にいれた独自の治療を行っています」と話す。鬼木医師はスポーツ外傷の中でも難しいとされる膝前十字靭帯損傷の再建手術など、靭帯・軟骨などの手術を数多く手がけ、その症例数や実績は県内屈指の整形外科医。患部の手術や治療と並行して、種目別や年齢など個人に合わせた復帰までのプログラムを作成し、トレーニング法や食事、薬、サプリメントの指導も含めたきめ細やかなサポートを行っている。術後、できるだけ早い時期か

らリハビリがスタートできるよう、最大で自分の体重の20%まで免荷できるトレーニングマシン「AlterG®」や、筋肉の回復具合を数値化する装置「サイベックスノルム®」など高性能なマシンや機器の充実ぶりにも目を見張る。さらにケガで落ち込みがちなメンタル面においては、心理的協議能力診断（ディプカ）などを採用し、データに基づいた心理的ケアも行いながらリハビリテーションを進めている。

専門性の高い治療を求めて 急増するスポーツ外来患者数

驚くのは同院のスポーツ外来の患者数の増加率。専門外来の開設当初の2013年の650人に対し、2017年には5599人の約8.6倍にも増えている。難しい再建手術などに対応できることも要因だが、近年米国のメジャーリーガーなども採用した再生医療の一つである自己多血小板血漿注入法（PRP療法）自由診療も手掛けるなど、より先進的な治療法を導入しているのも理由の一つ。実際ケガに悩むアスリートたちの間に口コミで広がり、患者は全国からやってくるという。当院には種目別の専任のリハビリスタッフがいることも特徴です。日々、担当種目を徹底的に研究



最大で、自分の体重の20%まで免荷できるトレーニングマシン「AlterG®」



治療と予防、パフォーマンスの向上を視野に入れてリハビリを行う

して回復からケガの再発防止、競技能力の向上へと導いていきます。彼らは国体選手や学生競技者のトレーナーとしても活躍するスペシャリストなのです。実践を共有しながら、有効なトレーニング法を研究しアスリートと一体となってパフォーマンスの向上を目指すという。若い学生たちにとってスベシヤリストのケアは、その後の競技人生に大いにプラスになるのも確か。ケガで好きなスポーツを諦めないように、一人でも多くの人がスポーツを通して豊かな人生が送れるように、そんな思いを持ちながら同センターの活動は続いている。